

臺灣生蕃の土俗學的研究

文學士 後藤朝太郎

一、生蕃の人口

今日は臺灣生蕃の土俗學的研究と題しまして、生蕃の主として風俗に就いての概説を申し上げたいと存じます。

臺灣が日本の領土となつて以來、出来る限り總督府では王化に服せしむる方針の下に、臺灣本島人は固よりのこと、生蕃の方面にも銳意努めて居られるのであります。大体に於て臺灣の生蕃は、行政區域の外に置かれて居つた傾があるのであります。けれども警察其他の手で、成るべく文明の方に導かうといふ趣意の下に、舊來の風俗習慣などが段々改良されつゝある爲に、吾々は此の民族固有の特色を興味を以て調べたいと思つて居ります。生蕃固有の風俗人情習慣といふものが、追々其影を薄くして參ることとは、已むを得ないのであります。由來私は支那方面の風俗人情習慣といふやうなことの取調に興味を有つて居ります關係から、臺灣にも數度參つて、臺灣本島人といはれて居る福建族、廣東族を實地に調査

しました。そして其本島人側の風習が蕃界方面へ次第に及んで参り、特に熟蕃は從來既に所謂支那文明に幾らか色付けられて居るといふことを見た。又基督教の影響が熟蕃には、大分深く入つて居ることも見た。さういう点で蕃界方面は、吾人は一種文明史上の興味を以て之を見ることが出来る。次に生蕃の部落に入つて見ると、臺灣本島人の方の支那文明の餘波を餘り受けて居らない。又熟蕃の方の影響も餘り受けてゐない。生蕃は何處までも生蕃の特色を保持して行つて居る。最近臺灣の生蕃に就いては、攝政の宮の御渡臺を記念に、生蕃といふことは甚だ殺伐であるから、高砂族といふ名前で呼ぶやうにしたいといふことが發表されたことがあります。確定的になつたかどうかまだ存じませぬ。今までの關係上生蕃と呼ぶ方が明治聖徳記念學會の皆さんにお分りであらうと思ひます。又其土地は舊の如く蕃界と稱して、話を進めることにしましょう。

生蕃の人口は十二萬といふ説と八萬五千位といふ説と、兩方あるやうであります。事實は八萬臺と云ふ方が本當らしい。臺灣全島の人口は四百万足らずで、三百七十萬からの臺灣本島人と、十六七萬居る日本内地人と、八萬有餘の生蕃と、これには孰蕃も多少入つて居るが、それ位のものであります。

二、生蕃の名稱

生蕃全體のお話をこれからしますが、それには先づ其八萬最餘の生蕃なるものが人種學の上で、どういふ風に分類されて居るかを見ると、之は地圖を見ると一目瞭然であります。北の方の山地に居るのを

タイヤル族といふ、此の地圖の赤い部分がそれである。蕃界北部の大部分を占めて居ります、それからブヌンといふのがあります。タイヤルとブヌンの其東側には、アミといふ種族が居る。又西側にはツオウといふ種族がある。其南にバイワンといふのがあり、それから小さい離れ島に居るのがヤミであります。それだけで六種類、更に小別をするとなんにもなりません。此地圖は總督府で刊行したのでありますが、大體この六種類になつて居ります。尙ほ細かく申せば細別が出来ますし、又蕃も諸處に介在してゐる。或は又化蕃といふのもあります。さういふのも段々調べるなら出て参りますが、今日は主としてタイヤルとブヌン、アミ、ツオウ、バイワン、ヤミ、此六種に就いて概説を申し上げます。

先づさういふ種類の名前は、どういふ意味を有つて居るか調べて見ますと、是はアイヌ其他の世界の未開人種に普通ある通り、其人種の名前といふものは、大抵人といふことを現はして居る。唯今申した中でタイヤルといふ言葉は、臺灣語で人といふ意味であるさうであります。ブヌンの種類では、ブヌンは人といふことを意味し、ツオウの種族でも人といふことを意味し、ヤミといふ種族もこれも人の意味、それでアミ族とバイワンと此の二種族だけは、人といふ意味でありませぬけれども、さういふ工合に四つまでが、總て人間といふ意味を現はして居る。詰り己れ達は人間である、其他の者は人間以下の者であるといふ一つの自尊心から出て居る名稱たることは申すまでもない。こは支那が自分の國を大夏、中華と稱して、其他は皆夷狄の國と見たのと同じことでもあります。

斯様に蕃人は大體六族に分れますが、そのうち臺灣の蕃族は北部の者が剽悍殺伐である。是は種々の事實が證明をして居る。殊にタイヤル族の中でも有名なガラン族といまのが最も剽悍で、なかく討伐隊などが行つても手に合はない。或は東の方の部分に據つてゐるのはタルコですが、タルコ討伐といふことは、宜蘭方面から先年度々やりましたが、容易に王化に服さなかつたのである。このタルコを初めとして、北方タイヤル族は餘程犖猛に見られて居るのであります。南方の蕃族は比較のおとなしい、無論例外としてはブヌン或はバイワンの一部分には、争鬪を起して仕様がなしいものもありますが、大體に於て南方は穏かであるといふことになつて居る。

三、生蕃の性質

生蕃全體として其性質を搔摘んで申すと、矢張り尙武の氣象に富み、又義勇というやうな氣持があつて、大變日本の大和民族と能く似て居るのであります。それから概して清潔で綺麗好きである。吾々が意外に思ふ位に、綺麗好きな點を見出すことが出来る。それから特に吾々の注意したいのは、生蕃の性質は一般に質着である、質實であつて名譽を重んずるといふことと、自分の耻辱になることは一切やらなといふ美点をもち又其氣力の強いこと、蕃社蕃社で自分が辱められたとか、名譽を毀損されたと云ふことになると、猛烈に反對してさういふことの決してないやうに、各自に注意する。是は別段法律がある譯でも何でもありませんが、自ら不文律の中に、さういふ感情が養はれて居る。大體斯様に申した所で

お分りでせうが、餘程太古の民といふやうな趣がある。リフアインドされて居らない代りに餘程質朴である。青竹を二つに割つたやうな氣象を有つて居ると批評されるのであります。能く西洋人などの分類法をします時に、先づ初めに石器時代といふものを持つて居るやうでありますが、臺灣の生蕃は矢張り概して申せばその文化の程度は、石器時代に今でもあるのであります。外のものも使ひますけれども石器といふものは相當に重きをなして居る。石鏃などを使つて居る所もあるし、又さういふものが發掘される所がありますし、燧石のやうなものを使つて居る所も諸處にあるし、木と木とを磨り合して其摩擦で火を出して居るといふやうな處もあります。それから尙ほ文字がありませんから結繩——物を結んで粟の收穫を記憶して置くとか、人と約束したことを結び目の數で覚えて居るといふ——便法を取つて居る。其外入れ墨をするとか、蕃狩をするとかいふやうなこと、多少首狩も最近に止む傾向を取つて來て居るけれども、大體斯様な風俗を有つて居る故に、石器時代の氣分のする目下の状態を想像して戴くと、あの話をして行く上の順序として、都合が宜しうございます。

四、生蕃の祖先

斯様な石器時代又は石器時代に似た文明の程度にある生蕃のことであるから、さういふ種族の思想、其他日常の生活上のことなどは、總て吾々の想像以上に質朴なことが澤山ある、又文明の最も低い民族の何處にでもあり得るやうなことが、矢張り蕃界に入るといふと無數に發見せられる。我日本の領土内に

斯くまで低いクルツールを有つて居る處があるかと思はれる位に、其間の興味を唆る譯であります。先づ蕃界南北諸地方に入りました際に吾々は、先づ斯ういふことを蕃人に聽いて見る。君達の祖先は何處から來たと思つて居るか、それから又祖先が來た所は、どの地点であるといふことになつて居るかといふやうな質問を出して見る。すると大概種族種族には祖先發祥の地といふものがある。所謂御靈の靈地として傳へられてゐる祖先發祥の地があり、其發祥地に伴ふ傳説がある。で多くは山の上の尖つたやうな或は非常に奇抜な角度を有つて居る巨巖怪石又素晴らしいサブライムな景色を背景としてゐる岩であるといふと、それが大抵其方面の種族の祖先發祥の地になつて居ります。あの岩から生れて來たのだ、あの岩から男女二人生れて來て、それから吾々の種族が廣まつたのだといふことを申して居る。或は又新高の山のやうなあゝいふ峯をつかまへて、あれが自分等祖先の發祥した山であるといふやうにいつたり或は又中には極優しい話がありますが、農家で粟を搗く時に使ふ粟臼に乗つて、此島へ渡つて來たのだといふやうに申す者があるさうであります。或は祖先の居つた處は分らないけれども、昔ある時非常な海嘯があつて吾々非常に苦しい目に遭つた、其時に竹に乗つて來たとは申しませぬが、其時に竹の節から生れて來たのだ、それから吾々の祖先が來たのだといふやうに申します。こは所謂竹筏のことを申すのだらうと思ひます。竹筏と書いて「ツパイ」と讀みます。竹筏といふのは大抵七八寸もあるやうな直徑の竹で、長さが五六間もあります、其竹をあたまた組合せて作つた非常に頑丈に出來て居る筏であり

10

ます。最近 攝政宮殿下も臺灣から御持歸りになつたやうであります。こは餘程巧みに出來て居るので、眞中に一つの桶が据ゑてあつて。其桶の中には貴重品、人などを載せる。桶の外に櫂が附いて居つて漕いで居りますが、その竹筏に乗つて來たといふのでありませうが、兎に角竹の節から生れて來たのだといふことを申して居る者があります。それから何に乗つて來たともいはずに、兎に角海岸に着いたのだといふことをいひます。本島に着く前は何處に居つたかと、蕃人に聽いて見ると、暑い南方の小さい國であつた、其處では裸體でも居つたけれども矢張り短い着物を着て居つた、さういふ所に居つただけれども、自分の五代程出の祖先が此島に來たのだ。初めは海岸で農業もやり漁業もやつて居つたが、支那の方から大勢やつて來て、吾々は山に追詰められてしまつた、今臺灣人の居る所は吾々の祖先が居つた所だといつて、多少遺恨のやうな意味を含めて憤慨して居つた者がありました。大抵祖先に就いてはさういふやうな思想を有つて居るのであります。

五、蕃界の頭目

無論さういふやうな話をするこの出來る者は、大抵頭目又は頭目に準するやうな人でありませんが、さういふ頭目の連中は、かつて日本に來たこともあつて、神戸の話、東京の話、砲兵工廠の話、飛行機の話も出來る輩であります。さういふ頭目連は、蕃界で重きをなして居りますことは無論であります。頭目は世襲的にやつて居るのもありますが、又蕃社蕃社で公選の結果選ばれた者もある。其選ばれた所

或は世襲的やつて居る頭目に外の者は、總て平等である。蕃社蕃社の社會といふものは、簡單なやつて居る。頭目自身は非常な裝飾をして舍る。頭から顔、首、胸、兩手、足に至るまで總て大變な飾をして、美しく又威嚴を示すやうに拵へて居る。さうして結婚などは自分共以下の者、平民共とは飾りやらない、ちやんと頭目の社會的の一つのクラスが出来て居る形になつて居る。君主國みたやうな形になつて非常な權能を有つて居るのであります。そこで此蕃社蕃社には其頭目を中心として一つの社會が成立つて居るのであります。吾々他の者が稀に蕃界をそれ／＼の蕃社を訪ねて見ても、山ばかり多くて、なかく蕃社に直ぐ取付く譯に行かない。ちよつと考へると普通文明方面から行つた人は、如何に蕃人であつても自分の蕃社を構成するといふ場合には、成るべく山麓の方の平地でも利用するか、或は何處か谷川の側にでも蕃社を求めらるるだらふというやうに考へるのであります。ところが蕃界に於ける生蕃と云ふものは、まるで吾々の想像を裏切つて成るべく嶮岨な山の傾斜地に自分の蕃社を造るのであります。傾斜地などは危なかりしく仕様がなと思はれるのであります。特に、殆ど必ずといつても宜い位に傾斜地を求めて、さうして平地は採らない。是が此蕃社交通の上に興味のある問題と思ふ。それで氣の利いた所では、其傾斜地の蕃社の廻りを竹林などで取回んで居る所もあります。

六、蕃社

それから蕃社の話に入りますが、此蕃社は家は十間、十五間或は數十間といふやうな圍まつて居る所

もありませんが、僅か數間しかない蕃社もある。それから大抵一の蕃社には俱樂部式のものがありました。さういふ所で皆が勢揃ひをする。近來總督府から色々經濟上の施設をして、力の強い息子達、或は壯年の人達に運搬の事業をさせてゐますが、さういふ連中は俱樂部のやうな所を中心として山の中心である其處へ各方面から集つて來る。大抵夜中の十二時頃兎に角夜半に松明を点けて勢揃ひをして、山の坂道を下つて來る。その時には、なか／＼一種悲壯だといつて宜いか、勇ましいといつて宜いか、氣味悪いといつて宜いか分らない氣持が致しますが、ねらい大きな聲をし乍ら下つて來る有様を度々見ました。さういふ蕃社には今いつたやうな俱樂部のやうな集まる所がありますが、其處へ夜明け前に到着して、無論跣で何も穿いて居りませぬが、跣の儘で俱樂部に集まつて夜明まで寢て居ります。無論着のみ着の儘の姿で休んだり、煙草喫んだりして居るのであるが、吾々も物好きにさういふ仲間の中に入つて、向ふの帽子を借りて被つて見たり何かして、慣れなれしくして居りますと、段々親みも付くといふ譯で、諸所蕃人と山の中を一緒に歩いたこともあります。さういふ俱樂部或は蕃社に依つては、物見臺のやうな、すつといろ／＼眺められる望樓のやうな建物の残つて居る所がある。或は又蕃社蕃社には共通の穀物を收めて置く所の穀物倉もあります。是は各々の家にあることもあれば、大抵三軒か四軒の中央に一つ置くといふ共同の倉になつて居るものもある。其他便利な都合の宜い場所では、總督府から生蕃の兒童の爲に學校を造つてやつて居る所も相當にある。矢張り君が代の唱歌も教へてゐれば普通の讀書も教へて居

ります。教科書は臺灣總督府で拵へたものを用ひて居ります。

大体蕃社全体を見渡して見て、吾々の感ずる所は、丁度汽車の窓から朝鮮鐵道の沿線の民家を見渡したやうな感じがするので、屋根が極めて低くて、さうして汚穢ないやうな、又場合に依ると堅穴の上に唯と椽を伏せたやうに屋根ばかりくつ付いて居つて、その下に家が地面以下に掘り下げて出來てゐるやうに思はれるやうながあります。或は又二棟の家で側面から見れば、三角形を成した破風の側がすつと揃つて居る蕃社もある。色々でありますが、一番蕃社で目立つ所のものは俱樂部式の家であります。それを臺灣では公廨と書いて居ります。是は後に申しますが、此處は丁度支那でいふと會館のやうなもので、斯ういう都合の宜いものは内地にはありませんが、何でも此處でやる。若い者の寢泊りも此處でさせれば、或は祭も此處です。それから總ての用たし便利をこゝで圖つて呉れてゐる。大層都合の宜いやうに組織されて居るのであるが、斯ういふ公廨——先に申した一種の俱樂部みたやうなもの——是は普通の家の高さより頭抜けて高く造られて居る爲めに、大變夏などは調法がられて居ます。

七、蕃社の建築物

蕃社の建物に就いて見るに、蕃社には住宅であらうが何であらうが、總て大工とか左官とか屋根屋とかさういふ専門家は居らぬ。皆自分の寮は自分で造るといふ主義であります。隨つて材料なども餘所から買ふといふこともなく、竹林の多い所は竹を柱にする、木材の多い所は成るべく堅い木材を使つて柱

を立て、それに屋根を葺く、葺く時もスレートが多い地方はスレートを用ひ、茅の多い地方は成るべく茅を使つて非常に急いで拵へるのであります。釘と云ふものはありませぬから、成るべく垂木や柱は葛のやうなもので結び付ける。又スレートの多い地方では屋根ばかりで壁なく、であらうと土間であらうと、總て何處も彼處も皆スレートづくめでやるのである。其スレートの厚み大きさは色々であつてどうでも宜しい、屋根などは自然の形のまゝのスレートで葺いてゐる。壁には壁土を用ひさうなものであります。壁を塗ることはしないで、大抵木の枝のやうなものをたくさん横に差すか、或は細い木を澤山に差込む。それで宛然露西亞人などの家或は樺太などで見る校倉式のあれ程丁寧なものではありませぬがまああんな感じのする壁であつて土は兎に角塗らないのである。それから柱には下に基礎の石を置くといふことはしない。矢張り丁度日本の古い時代と同じやうに、底つ岩根に宮柱太く立て、といふ格で、非常に長く深く掘り込む、突込むのである。決して土臺石を置くといふことは未だ曾て見たことがない。又聞いたこともない。さういふ所はうぶな原始的な所が見られるが、尙ほ日本の神社などにある千木のやうなものがある。千木といふ譯ではないが、さういふものがある。茅茨の先きは切らず、枝は摘まず、總べて有りの儘の木や枝で作るのでありますから、幾らでも直きに出来る譯であります。大体の感じは尙ほ大寫眞帖にも出て居りますが、生蕃の住つて居る建物は、つまり非常な原始的なものであつて、さうして外から見て原始的であるのみならず、中に入つて見てもさうである。室に仕切と云ふものが無い、

殆ど一室で大きな室になつて居る。其隅つこに小さな床を附けまして、其手前に圍爐裏が切つてある。切るといふよりも石を列べて、圍爐裏を拵へてゐるのである。天井から葛をぶら下げまして煮炊きをする鍋のやうなものを釣る。そんな工合で室内は、窓が小さくその數も少ない爲に、大變に暗い。何處の家を訪ねて見ても、外の明るい所を歩いて居つて室の中に入つて行くと、而かもそれが普通の高さならば宜しいのでありますが、家の中に入ると、穴倉に入ると段々下つて行くのでありますから、何だか堅穴に入るやうな氣がする。居る筈の人が見えない、暫く靜かにして見て居りますと、隅ツこの方でもよろ／＼火の燃えて居るのが見える、其側へ行つて見ると人間が居るといふやうな譯で、暗い處に平氣で居るのであります。それから蕃の家には別に厠を立てるといふやうなことはない。殆ど蕃社には厠は無いので、大抵豚小屋か何處かさういふやうな處で、用を足すのであるかと思ふと、そんなこともしない。大抵何處にでも勝手にやるのであります。それから頭目の家は、門の所に碑が立つて居ることがある。それも時たまであります、之に人形の姿をした像が彫刻されてあつて、其胸の所に、錦蛇の三角頭をしたのが長く出て居る彫刻が施してある。それ位のことでは普通一般の所には餘り門口の處には裝飾的のものは何も見當りませぬ。

八、蕃人の家庭の風俗

さういふ蕃社蕃社をすつと訪ねて、さうして今度家庭的の方面の話に入ります。蕃人の家庭は無論普

通一夫一婦の家族制度で、之に子供が居る。主人の男の方は外に狩に出掛けるのが原則になつて居る。それから女の方は農業をやり或は器物を造り、又こゝに陳列してあるやうな織物を織るといふやうなことが重なる仕事であります。それで家庭に於ては息子が段々大きくなつて年頃になるといふと、家には置かないで先に申した公廩——俱樂部——の方にやる。其處にはさういふ未婚者の腕白者が澤山に集つて居る。家庭では女の方は外へ出す譯には行かぬので、家へ置いて居ります。老人も同様である。さういふのが原則になつて居ます。それで家庭に於て吾々が最も奇異に感ずるのは、母親或は姉達が寄つてたかつて十歳位の子供に入墨をしてやることであります。殊に女の子に入墨をする場合は、随分残酷なものであります。大抵是は金屬製の刷子があつて、其の針を巧く頬べたへ鈍で叩き込む、さうすると腫上つて非常に痛がるのであります。暫くは血が出る、それを拭く、拭き取つて丁度鍋墨のやうな黒いものを擦り込む、擦り込む時に圖案の模様を現す、主として直線的の模様であります。それを何回もやる。それを痛がつたり頬を歪めたりすると、其圖案がをかしく歪んで来る年頃になつても貰ひ手がないといふことになる。それだから直線は直線として入れさせるやうにするのが大事なことになる。居ります。是は戶外で明るい所でやりますが、母親が足をはだかつたやうにして、自分の足の股の所にわが娘を上向けさせて藝術的にやつてゐるのであります。二人も三人も掛かつて動かないやうにして、丁度吾々が病院で手術臺の上で手術を受ける時のやうな風にしてやるのであります。見て居つて非常に可哀な感じ

のするもであります。それから花蓮港方面の或種族は、日本の内地と同じやうにお灸をすえる習慣がある。是は艾と違ひまして木を墨のやうにして背中に載せてお灸をすえるのであります。斯ういふのは灸の材料は違ひますが、日本の内地の習慣と似て居ること、思ひます。尙ほ家庭に於ては織物、重ものに麻の織物であります。是は女の仕事であつて足を伸して三角形の空ろの木で出来てゐるものを用ひる。餘り長い物は織れないが、此處にある四尺位の此の切れがそれであります。材料は殆ど麻ばかりと申して宜しい。染料としては茶色或は黒で、これは土地で得られる染料である。此の赤の色は重に内地人或は支那人種である臺灣人、斯ういふ連中から毛布のやうな類のものを得て、それを解して纖維をとり、之を利用して各々好きな圖案を織り出すのであります。蕃界には赤い染料がありさうなものと思はれませんが、どうも輸入品で間に合せて居るのであります。

九、男子の蕃人の仕事

それから此家庭を後にして外へ出かけて行く主人、男の方の仕事としては是は申すまでもなく狩獵に出かける。是は鐵砲を持ち、タオカンと云ふ網の袋を持ち、或は又色々な鎗を持つて参ります。吾々蕃界を朝早く四時五時頃から起きて歩いてゐると、非常に氣持の宜いのは勿論であるが大道にあたつて、胸の赤いのが向ふの方から駈けて來るのが見えます。慣れない間はさういふ聲が近づいて來るものですから、非常に氣味悪く、擦れ交ひになるその時に能く見ると、矢張り三叉のやうな鎗を持つて居る、さうして

腰に籠を下げて居る。それは後で分つたのでありますが、朝早く溪流に行つて鮎を取りに掛かけてゐる所であります。魚を突刺すことはなかく、巧いと云ふことであります。さういふ魚を取る位なことは宜しい、兎に角蕃人が狩に出かけるやうな場合に、吾々は随分屢々山で出くはすことがある。阿里山の七千尺あたりの所に二萬平ニマンゲイラ或は十字路ジウジツロといふ處がある、其處を私が通り掛つたことがあります、其邊に下の方から大きな網を脊負つて、其網に二匹入つて居つたか三匹入つて居つたか知れませぬが、大鹿を射たと見わて足を折纏めて一ツの大きな網に入れて、右手に鐵砲左手に鎗を持つてゐたタバンの蕃人の上つて来るのに、道で出くはしたことがある。その大鹿は出掛けて來た初日に取つたのであるが、二日目か三日目に取つたのか分らないが、要するにかれらは一匹でも取らない中は家に歸らない習慣ださうであります。何日間か食べる材料を持つて山に登るのである、さういふやうなことは男子の仕事として極めて眞面目にやるのであります。

十、首狩りの風習

それから尙ほ蕃人の男子に對して誰でも聯想されるのは、首狩の話であります、是は臺灣では、首狩に行くことを出草に出かけるといふ、草の中からねらひ撃をして取るのであるから、そんな所からこの名稱が起つたことと思はれます。此首狩に就いては色々話を面白くする爲め、或は氣味の悪い話を人に興味を有たせる爲め、有る事無い事尾に鱒が附いて、色々間違つたことが傳へられて居るやうであります

けれども實際首狩は蕃人自身に取つては、唯手當り次第何時でも人の首を取るといふのではない。蕃人の男子に出會つた時には、何時でも氣味悪いやうな感じがしますが、少し向ふに居つて慣れて來ると、何の事もない。宜蘭から太平山の麓の邑里社といふ所に行つたことがありますが、其邊では諸などを作つたり穩かな仕事をして居る蕃人が居りますが、これは殆ど蕃人と思へない程従順な蕃人でありました。蕃人が首を取るといふことは、重にどういふことなのかと云ひますと、先づ人情でありませうが、自分あ家内を持つといふやうな場合に、自分の過去の經歷を飾る爲に、自分の腕で取つた首が首棚に澤山數がないと云ふことは、自分の恥辱であるといふやうなことが、一つの理由になつて居ります。出來るだけその數を澤山にする。それも取る時の Derrick 話をする、成るべく頬骨の張つて居るのが首棚に飾るに倒れないから、さういふのを成るべく見つける。その結婚の仕度といふ意味もありませうが、又蕃社に依つては、一年に一回或は五年に一回、八年に一回と粟祭を盛大に行ふその爲めに、祖先の靈を祭る時には、首棚に首が多い事を希望する。さういふ爲にやることがあります。祖先に對する敬畏の念から、首を取つて來るのである。首狩に就いては色々話もありますが、其の土地に入つて見ると、そんなに奇異には感じない。蕃人としてはありさうなことだと考へる爲であるが内地で考へる程不思議な氣はしない。今日中部阿里蕃山にはないが、その以北霧社からタイヤル種族かけての方面では、出草は絶対に無いと云ふてとは申されない。無いと云ふ報告は出來て居りますけれども、事實部分的に調べま

すと、相當にそれがすつかり纏まつて居ると云ふ報告は、事實は出來ないだらうと思はれる。

十一、蕃人家庭の情緒

蕃人の中で頭目が使ふのは是でありませんが（鉛を示す）頭目でない人は竹で作つたり木で作つた鉛を使つて居る。是はバーランとかダツタカとか、中部の蕃界に行つた時に得た材料であります。是は頭目の使用して居つたものでありますが、頭目と申すと、えらいやかましいやうであります。先づ其邊での頭役である。蕃人が二重橋前に行つた話をして居りますが、自分等が行つた時に、一向日本の頭目が出て來なかつたといふことを云つて、二重橋前の追想の話をして居つたことがありましたが、自分を以つて他を極手軽く考へて居ることは、むりからぬことであります。頭目などの留守中家庭を訪ねて見たことが度々あつたが、女子供は留守をして居る。女は大抵股引又は袖などに赤いものを附けて居ります。それ（陳列品を指し）にもありますが、赤い切れを附けて近所の畑に行つて薩摩諸を掘るとか、農事に従つて居るものもある。それで來客でもあると、直ぐ家の者が其の母親を呼びにやる。そうすると赤い切れを附けて居るから、あれこそ本當に萬緑叢中紅一點で、一里先きでも直ぐ分る。二里や三里位はなれた畑に行く、大きな聲をすると聲が能く通るので歸つて來る。段々話が岐路に入るから省きますが、種々の興味のある話が之にある。蕃人の子供は、弱い體格の者は早く死んでしまふので、良い體格の者のみ育つ、四歳か五歳位の子供がそばに近づき、洋服の此ボタンを欲しさうな顔をしていちちつて居る、小さいボタ

ンでもやると首飾、胸飾などにするので喜ぶのであります。手鏡のやうなもの、マツチとか色々土産物を持つて行つてやると、大層喜ぶのであります。

蕃人の普通の家庭にては、人の死んだ時にどういふ取扱をするかといふことを調べて見ますと、是は別段に墓地があつて其處へ持つて行くのでなしに、家の中の隅こに大抵葬るやうであります。それで一人葬り二人葬り四人位葬むると、其家を全部捨て、しまつて他に移り、そこに建築するのが普通である。それで死んだ人の靈魂が色々家に禍をするといふことに就いて、信仰に迷信のやうなことは非常に多いのであります。死人を取扱ふといふことに就いて、普通の死に方で死んだのであれば、そんなにそれを氣味悪くは取扱はないやうであります。併し既に一遍立去つてしまつた家には、再び空家になつて居つても、誰も其處に入らないといふことは、大分嚴重に行れて居るやうであります。

さうして尙ほ家に使つてゐる道具類、細々した物は抜き、其處に陳列して置いた所の材料は、大抵家庭で拵らへる所の裝飾品であります。是は出来る限りは、其蕃界内部の材料で辨じてしまふ。よくよくのものだけ、外からの材料を使ふといふことになつて居ります。最近には總督府で、物々交易場といふものを拵らへてやつて、猿の骨とか鹿の角、殊に袋角、木耳、種々な土産物を其處へ持つて來れば、人工的材料と其處で取換へつこしてやる。中には物々交換の上で暴利を貪るといふことで、總督府の役人が監督して不公平にならぬやうにやつて居ります。

尙ほ蕃人には、姓名がちやんとあることは固よりであります、其の名前を附けるに當つて親名を一且つけて呼ぶ。其の名は漢字を書かないで片假名で書いて門口に貼付けてある。熟蕃になりますと漢字を使つて居る。生蕃は片假名に極つて居る。

十二、蕃人の趣味嗜好

次に趣味嗜好の方面のお話を致します。蕃人とても相當の趣味生活はやつて居るのである、蕃界の如き非常なサブライムな景色を有つて居る所であれば、生れると同時に自然の風景の好いこと、自然の美を感じて居ることは、吾々以上なのであらうと思はれます。随つてさういう自然の春景の下に音楽などを相當に發達させて、例へば喙琴と云ふもの、これは口の所に當て、ピン／＼と鳴らす琴です。甚だ簡單なもので竹片に一種の瓣がついてゐて、之を口に當て、吐出す息で之を振動させる、此の振動に依つて好い唸りが出る。かやうな樂器もあれば、或は弓の形をした又一種の琴も有ります、又鼻で吹く所の鼻笛もある。或は普通の竹筒の笛もある。又粟を杵で搗くといふやうな場合にやる所の一種の杵、杵は樂器ではありませぬが、樂器に利用して砧のやうにトン／＼打つて樂器に代へる。樂器を利用して生蕃は歌を唄い踊を踊る。其場合に蕃人は決して一人で踊らない、踊る時には多人數が恰も日本の田舎で盆踊りをやる時のやうな調子で圓く輪を拵らへて、さうして段々と人數が殖えて来る。それで身體を前に或は後に、或は足を出したり引込めたりなどして、さういう舉動調子をとつ、踊るといふ、非常に單

調な踊りであります。けれども、さういふ踊り方であつて、内地流に坐つたり蹲んだりはしない、必ず立つて居るまゝで出来る踊りなのであります。是は服裝の關係やら、土地の關係があるのだらうと思はれます。

尙彫刻、是も簡單でありますけれども、身の廻りに付ける相當の彫刻がありますし、或は物の裝飾にも幾分の彫刻を使つてゐます。それから畫は見ませぬが、兒童の公學校に行つて兒童の自由畫を見ますと、矢張り蕃界獨特の圖を相當に器用に書いて居る子供がある。從來は此蕃界の或地方では文字を用ひない、書は書かない、字を書くことは何か懲りたことがあると見えて、自分の民族が亡びてしまふのだと云つて絶対に字を書かない。中には人に勧められて臺北の師範學校に入學して居る者が、時たま家の方に手紙をやつても、誰も讀む者がない、何故寄越したといつて叱られたといふことである。其の叱られた子供が一遍東京に來たから、それに會つて色々話をした所が、此頃は赤いインキで書いてやつた所が、赤い色は是はいかぬ、黒で書くのを赤で書いたのだからいかぬといはれた。どうも國の方に手紙をやる譯にいかぬので困りますといふことをいつて居た。是は全部ではありませんが、南方のバイワンと云ふ一番社の青年の話であります、そんな事實もある。

それから尙趣味の方面で、圖案とか織物の柄であるとか、或は身の廻りに付ける彫刻の圖案などは、どうかと云ふと、さういふものは主として直線本位であること、先刻申した入黒の場合と大體同じで

あります。色は赤も使へば紫もある。黒もある、茶もあると云ふことであります。主として間色よりも原色の方を貴ぶことは申すまでも無い。都會に居る人の頭には、ちよつと浮ばないことであるが、蕃界のやうな極殺伐な、而も自然の景色の偉大な所に居ると、一種自然の力に抑へ付けられたやうな底力のある重苦しいやうな感じを、何時も吾々は受ける。阿里山に參つても、あの八千尺近い所に直径の一間半も二間も、すつと大きいのは三間も、此部屋位の大きな檜が——ベニヒですが——あります。直径の一間や一間半位のものは眼中に置かれない。塔山と云ふ大きな巖嶺がある、その外蕃界の諸地方にある樟の山などは、全山悉く樟で蔽はれてゐる。斯ういふものを考へて見ますと、其の景色が非常に大きくて、蕃人が此大きな自然の影響を、非常に深刻に受けて居りはせぬかと思ふ。殊に暴風雨の時などには八千尺一萬尺といふやうな高い所から、急轉直下に大きな岩の一角が壞れて落ちて来る、其悲壯な殺伐な氣持は、何とも云へぬ素晴らしい氣持がする。かやうな光景を見て居る生蕃の心裡には、矢張り同じやうな殺伐な影響が來ることであらうこといふと感ずる。丁度御互が被服廠で三萬何千人からの人が死んだといふことを聞いてゐると、其後に十人二十人死んだことを聞いたところで、大して同情の念の起らぬのと同じやうに、蕃人は非常なことに慣れてゐる、さう云ふやうなことが蕃界にあるのではないかと思はれます。つまりこれがかれらの性情の背景をなしてゐるのではないかと想像されるのであります。

尙ほ蕃人の嗜好の方面から申すと、其處に煙管がありますが、竹の根で拵へたものである。煙草は自分で自由につつて刻煙草として喫む、酒も無論飲む、酒は重に粟で醸した酒で、醸す方法は齒で嚙碎きて醱酵させる、日本の言葉で醸すといふのは嚙み成すといふ意味で、矢張り日本の上古も生蕃と同じやうであつたのではないかと思はれます。

尙ほ食物に關しては、常食物としては芋を喰べたり米を喰べたり、副食物は魚其他是は幾らでもありますが、唯生の肉を喰べることには吾々と能く似て居る、鮎の一尺二三寸、二尺近くの鮎が取れますが、それを洗ひの料理をして生で喰べる。吾々が霧社で頭目を訪問しましたとき、鹿か何かの生の肉を其儘切つて箸で取つて呉れる、喰べない譯に行かず、困つてしまつたことがあります、一体齒で醸した粟の酒といふものも臭くて、ちよつと飲めない、其處へ持つて行つて、生の獸の肉を御馳走のやうな積りで呉れるのだから、非常に困つて假にポケットへ入れて置いて、外へ出てから失敬したことがあつたが、さういふことはまことに困る。尙ほ襪のやうなもの或は祝ひ事に餅を搗くと云ふやうな事は、稍々日本内地の風習に似てゐることであります。

十二、蕃人の信仰方面

次に信仰の方面の話を致します。生蕃全体を通じて信仰はどういう風に見られるかと云ふと、是は人間を本にしまして、人間といふものは肉と靈から成立つて居る、其肉に靈が附加つたものが人間である

と見て、そこで其靈を成るべく逃さないやうにすること、それを餘程苦心してゐる。例へば噓をするといふことは靈が逃げるのだからといふことで、非常にそれを嫌ひ不吉なことに考へる。噓で靈魂の一部分が外へ出てしまふと考へるのです。或は放屁をするといふことも、非常にいけないことになつて居ります。さういふやうな譯で靈を出させないといふことを、向ふでは大變重く見る、其様に死んだ靈に就いての考が、又面白いのでありますが、是は人が病氣なり何なりで死んでしまふといふことは、無論靈魂が外へ出たと見る、其の出た場合に靈魂なるものは、矢張り別の世界があつて、其處へ大勢集まつて居ると見る。それは矢張り、此世に於て男女が澤山居ると同じやうに、同じやうな社會を拵らへて居ると見る。丁度此の現世に於て男子は首狩をして來るとか、獸を獲つて來るとか、女が家で機を織るといふことがあると同じやうに、靈の世界に於てもさういふことを靈魂がやることになつて居る。ところが其の靈魂の世界に行きても、幽靈といふものが矢張り考へられて居る。それは主として敵の蕃人が自分の部落に來て殺されたと云ふ場合には、さういふ者の靈魂は幽靈として徨ふて居るとされて居る。或は自分の仲間が死んでしまつて、その後其死體を早く葬らなかつた爲めに、其人の靈は靈の世界に行つて犬になつたり、豚になつたり、蛇になつたり、狸になつたりすると、さういふやうに一種の獸環説を唱へて居るやうであります。

それでその靈魂の社會の中に神様といふものがあると考へられて居る。其神様の中で一番力の強い神

様は、自分の一番最初の祖先の靈と云ふことになつて居る。其の祖先の靈魂は此現世に於て非常な深い關係を有つて居ると云ふことで、其靈魂に崇られては非常は困る、農業の方では不作があつては困るからと云ふことで、農業の方のお祈りをする、或は日常生活に於ける吉凶禍福、或は生殖の問題の事、其外技術上のこと、或は戦争のこと、首狩のこと、又は色々病氣をしないやうに、又長生をするやうに或は自分の蕃社内の平和が保てるやうにといふやうなことを神の靈、祖先の靈に向つてを祈をする。是は全くありさうなことであります。其祖先の靈はどういふ形を取つて現はれて居るか云ふことになるとはつきりした概念はないのであるが、併し普通の場合に於て、從來の蕃社に於ては、首の飾つてある、首柵に石を何段でも置いて、其中に髑髏が一つ／＼入れられるだけの室が拵らへられてあります。それを引出しを抜いた後の柵のやうな形になつて居りますで、それに首柵が數十個も入れてあります。其首柵が神様の座する神座であるといふやうに考へられて其處に行つて戦勝を祈り或は農業を祈るといふことになつて居るのである、従つて其處が神聖な所になつてゐる。或は獸の骨を祭る所も一種の神柵式に見られて居る。此の信仰方面のことで、曾て蕃人に斯ういふことを聽いて見たことがある。太陽や月に對してお前さん達は、ごいふやうに考へて居るかど聽いて見ますと、太陽に就いては、特別に信仰は有つて居らぬ、何か太陽神話の材料になるものはないかと思つて、質問を發して見た。ところが彼等は太陽に對して、寧ろ恨みを有つて居るやうに考へられた。是は無論その祖先が非常に暑い國に居つたと

いふ關係でありませう。頭目の言ふに、元と太陽は空に二つ居つた、非常に熱いものであつて、吾々を燒殺してしまふ勢を有つて居る、故に何とかして之を射殺さなければならぬと云ふので、自分の先祖達は非常に努力をした。其時にプリンスが居つてその王子は弓を射ることが巧みである、勢揃をして射止めやうとしたが巧く射ることが出来なかつた、最後に王子が射たのが命中した。一つの太陽は光を失つてしまつた、其光を失つたのが月である。そしてその時欠けて散つたのは星になつたのである。もう一つの太陽は射ることが出来なかつたから、毎日吾々を未だに照り付けて居るのだ。かういふ考を述べて居る者がありました。其他五色の月が空から下つて來て云々といふ話があつた、天体に對する神話的話はまだ段々ありますが、吾々が太陽を有難いと思つて居るのは、吾々が寧ろ温帯に居るからさういふことを考へるので、熱帯の方では違つた考を有つて居るのではないかと考へる。此等は南洋方面の神話と比較して見ないと、うっかりしたことは申されないのであります。

十四、蕃界の祭祀

尙ほ信仰に關聯して祭のことも相當に盛んに行はれて居るが、是は主として農業の方に因んだこと、それから自分が禍を受けぬやう魔除をするのとの兩方があるのですが、農業の方面に就ては種子を蒔く時、刈る時、それから供養をする時とか、祖先の靈を祭る時とか、首祭の時とか色々あります。或は收穫が旨くあつた後で、謝恩の意味で祭をする。或は首狩の後で、或は漁業した後で祭をするとか、其

他雨乞であるとか、種々な意味首祭るのがあるが、こは取分けて申す程のこともありません。

一般文化の程度の低い爲に、蕃人に向つて吾々の最も興味を發することは、蕃人の迷信の問題であります。是は先年種積老博士がタブーの研究を發表され、それに世界各國の面白いタブーの比較研究が出来て居りますが、生蕃のタブーの思想は、物を嫌ふと云ふ深刻な迷心があつて、後で禍が自分の身の上に落ちて來ると云ふことを大變氣に病んで居るのである。それが悉く生活に重大な關係を有つて居ると考へられてゐるのである。例へば建築をするといふ場合に、自分の家は自分で建てる、家族のものが手傳ふ、さふい場合には、最も謹嚴な態度でなすべきもので噓を一ツしてもいけない、或は放屁を一つやつてもいけない。大變やかましいことになるのである。或は男女の間の不眞面目な冗談話をするといふことも勿論いけない、さふいふことに就いての迷信は、非常に峻嚴を極めたものであります。それに就いては種々の興味ある例があつて、當局の調査報告にも精しく出て居りますが、左に重なる所を掻摘んで申して見ませう。

首狩に出掛るとき或は祭をする時とかいふ場合には、どういふ譯であるか、蕃人は植物の麻に觸れてはいけないといふことをいびます。或は自分の家では永年絶えさないやうに保存してあるその火が、ちよつとも消えるやうなことがあつてはいかない、未開人のところには何處にでもあることであるが、歐羅巴でもヴァージンといつて羅馬などには、すつと火が昔から續いて居る。生蕃にても昔の火が絶えな

いやうにして居る。又病人のことに使ふ火は別にして、元氣な者に使ふ火は火で、それと嚴重に區別しなければならぬといふことになつて居ります。

それから外へ出掛ける場合の迷信に就いて述べよう。これは自然現象を以て自分の縁喜を卜ふのであつて、蕃人はひどく神經質にやむ。外へ出掛るときは、例へば鳥の鳴聲、犬の遠吠、蛇の出て來たといふやうなことがあるとすると、直ぐ其の蛇なら蛇を殺してしまはなければいけない、さうしなければ魔に誘はれる。又蛇がちよつとでも自分の家に現はれることがあつたなれば不吉だと云つて、その家を去つて移轉してしまはなければならぬ、さういうことは非常に眞面目で嚴重に考へられて居る。吾々生蕃を連れて山の奥の可なり險阻な所に分け入ります場合には、通譯に總督府の巡查の人を行つてもらふのであるけれども、荷物等は蕃人に擔がせるのが一番宜しい、さういふ場合に折角朝早くから出掛け、晝前いざ是から險阻な所に掛からうといふ時に、小鳥が一匹小徑でも横切つて飛んだとするとさあ大變だ。鳴き方が何とかで、あの鳥が遮つたから直ぐ家へ歸ると云つて、荷物は其處へ置放し飛ぶが如く歸つてしまふと言つても聽かない、自分の家に不吉があると云ふのか、自分の身に不祥事が來るといふのか、兎に角不案内な自分を置放してあのことなど心配することなく飛んで行つてしまふ。さう云ふことを考へて見ますと、蕃人の迷信といふものはなか／＼馬鹿にならない。さう云ふことは幾くからでも材料がある。

此の迷信の方面のタブーの研究は生蕃と文化生活をやつた經驗からして最も興味があるやうに思ふ。

東京でも擔ぐものは隨分人に笑はれることもありますが、蕃人の社會に於ては此方面の迷信が尙更多くあつて、實に興味深いものであると思つて居る次第であります。精しく申す時間もありませぬからこれ位にして置きます。

十五、蕃界の交通狀態

以上申し來た所で生蕃の土俗方面の概要は、御了解下すつたことだらうと思はれますが、此蕃界を視察する場合のことを、序に附加へて置きたい。それは臺灣の一体山地といふものは、海岸からして山の頂上まで西の方面は非常に緩な傾斜で、次第次第に山に登つて行く、阿里山の如きは丁度嘉義の町から竹頭崎や獨立山を越えて三十二哩段々登つて行く、之に反して東海岸の方の側になると、急轉直下に落ちる。さういふのが臺灣の地勢の大要になつて居る。南方に參りますと海拔幾らも無い、百尺から二百尺位の平野からして、急に九千尺一萬尺といふ高い峻嶺になる所がある、大武山の如きそれである。要するに西の方は緩、東の方は急と云ふことになつて居ります。さういふ大体の地勢の所に於て蕃界に入て見ると、二千尺、三千尺、五千尺といふ大變に深くて長い溪谷がある、それ故に阿里山鐵道の如きも大變長い間問題になつて居つた位であります。始終、鐵道が阿里山の絶壁に掛つて居る爲めに、何回でも落ちる、嘗つて自分共の登つた時など枕木の辛じて留つて居るやうなこともあり、保線工事をしても大雨の爲めに機關車も列車も同時に落ちて、材木や人命を失つたことが度々あるので、其損害は毎年少

くないこと、思はれる。現に吾々が阿里山鐵道に乗つて參つた時も、此の阿里山線のトンネルは皆で七十からあるが、三十幾つの處まで登つたところで、それからあとは非常な豪雨でトンネルが潰れた爲め不通になり、銘々歩いて呉れといふことで二日間トンネルの中のごろ／＼の道を蠟燭を点けて歩いたことがある。トンネルから出て見ると、岩がそこに落ちて居る、危い岩の下から出る。一足違へば非常に深い何千尺の谷に落ちるといふ、さふいう危かし所、猿も容易に渡れないやうな所である。平素蕃人はその下に住居として居るのだから、實に不思議な位であります。

蕃界のこれらの路は一々その絶壁を下りて、又上まで上ることは出来ないのだから、蕃人は急な傾斜地には二ツの山と山を結付けるに、葛の吊橋を掛けて居る。其の葛の橋は相當によく出来て居つて、之を渡るには手摺ではありませぬが、兩側に手をつかまりながら進み行けるやうに出来て居るものがあり下は板が一枚通り渡してある、其葛の橋の上から下を見るといふと、數千尺下の方に水が流れてゐる所が見へる、又時々ま足の下の方に遙かに胸に赤い飾をして居る生蕃などの小さく見へてゐるのがある落ちたら最後であります、さういふ所を幾回となく渡らないと、中央山脈に達せられないと云ふやうな所もある。私は蕃人の作つた橋や臺灣總督府で拵らへた鐵線橋などを數回渡りました。橋は兩方の岩の根に深く穿つけてあつて、それが力になつて六十間とか百二十間、かいふ長い吊橋になつてゐるのであります。それが途中で上下左右に動き出すときは、氣持が悪くなつて腦貧血でも起しさうな感じがす

る。それでも蕃人は荷物を持つてドン／＼渡つて行つて待てゐる。こちらは橋の途中で氣持が悪くなり何回となく休んで随分幾度か厭な思をして漸くにして彼岸に到達するのであります。さういふ交通機關はなるべくやめて、將來は自働車の横斷道路を拵らへると云ふことであります。唯今でも臺中方面から浦里に出て山越しに花蓮港に出る線は、相當に立派なものが出来て居るやうであります。そふいう譯であるから今日は、まだ蕃界に入ると云ふことは、随分氣味の悪いこともあります。けれども、不可能なことではない。殊に氣候などは西海岸の平地地方と違つて大變に宜しい、山地のことゝて空氣の良いことは固よりでありますし、又山中に入りますと巡査の派出所が隨所隨所に出て居りますから、次から次へと電話で聯絡を取りつゝ進むところも出来るのであります。

今日お話申上たのは、實は臺灣蕃界の概要を申上げたのでありますが、日本の上古と蕃社とは、稍々似寄つて居る点がちよい／＼ありますので、今日は其の全部を申すことが出来ませぬでしたが、實際に心の文化を踏査して見ますと、日本の上代例へば古事記に見えた古い所を調べると云ふ場合に、學者は臺灣のことを考へ中に入れ、どうにかして臺灣の此の現状を一遍見て置いて貰ひたい。その首飾をしたり梓の杖を持つて山の奥から出て来る頭目の姿などは、如何にも神代の尊い方の御姿でも拜むやうな感じがする。言葉を聽いても、單語が時々日本の古い單語に一致するものがあつたり、或は言葉の音調アクセントが、如何にも日本語式になつてゐるものがございます。又生蕃には日本の傳説と聯絡ある傳説を有つてゐる話もありますから、此等のことをお調の方は、一度是非蕃界の實地踏査といふことをやつて戴きたい、其事を希望として附添へて置きたいと思ひます。